

# グローバルゼーションと臓器泥棒の噂

渡辺 良智

## <要旨>

1980年代以降、世界各国で臓器移植が広く行われるようになってとともに移植用臓器の不足や臓器売買が問題となり、臓器泥棒の噂が世界中で聞かれるようになった。本稿では先進国から開発途上国まで聞かれた一連の臓器泥棒の噂を収集し、これらの噂は都市伝説であることを確認した。さらにこれらの噂がグローバルゼーションの結果世界中に広まったものなのかについて検討した。都市伝説の特性である、話のモチーフと話の構造という2つの観点からアプローチしたところ、殆どの噂は既存の伝説を原話としていることが確認された。ついで、中南米の子どもがアメリカへ送られて臓器が取られるという噂の広がり方をみた。さらに、アフリカにおける白人、権力者とその協力者を吸血鬼とする噂、アンデス高地における原住民から脂肪を奪うピシュタコと呼ばれる悪魔の噂、これら2種類の噂を取り上げて、植民地および独立後の開発途上国の民衆が、自分たちが置かれている状況や資本主義をどのように表象しているか検討した。最後に、臓器泥棒の噂をきっかけに発生したパニックの事例を取り上げた。

キーワード：グローバルゼーション、臓器泥棒、噂、都市伝説、吸血鬼、ピシュタコ、パニック

Keywords: globalization, organ-snatcher, rumor, urban legend, vampire, Pishtaco, rumor-panic

## 1. はじめに

21世紀に入っても経済、政治、法律、教育、科学、技術、文化、レジャー、スポーツ、環境問題といった様々な分野でグローバルゼーションは進行している。かつては一国内で完結していた医療の分野でもグローバルゼーションは例外なく進行している。BSE、SARS といった流行病は、一国内に封じこめることはできず、またある国がその侵入を水際で防ごうとしてもヒトの移動のルートに乗って楽々と国境を越えて侵入してくる。新型インフルエンザも例外ではなく、現在、日本でも大流行している。また、近年、医療ツーリズムが盛んになっている。最新医療設備が整い腕の良い医師が診察や手術を担当し入院施設も完備している外国の医療機関で手厚い医療サービスを受け、さらにはリゾート観光地へも案内される、というものである。医療も国境を越えるのである。

そして、とくに、臓器移植という先端医療においては、ある国の国内だけでは完結できない事情がある。なぜならば、多くの国々では、腎臓、肝臓など移植用臓器の提供はまったくの代償なしの提供者の善意に頼っている。その結果、殆どの国では移植希望者の数は臓器提供者（ドナー）のそれを大きく上回っている。移植希望者は、待機リストに登録さ

れ臓器の提供を待っていても、自分と適合する臓器の提供者が現われるまで何年かかるか見通しがつかない。移植が間に合わず亡くなる人も少なくない。ではどうしてドナーを増やすのか。ドナーカードを普及させ、さらには臓器移植を拒否していなかった人の遺体から（心臓死・脳死ともに）臓器をもらうことが目指されている。

そして、必要な臓器を購入して命を延ばすことも考えられる。現実には臓器売買が行われている国は存在している。だとしたら、生存するためには多額の費用がかかってもその国へ行って希望する臓器を購入して移植手術を受けたいという人が出てきても何ら不思議ではない。けれども、需要があれば、これに対応して供給をすぐに増やせるかというと、一般の商品と異なり、人間の臓器の場合、そう簡単に供給は増やせない。まず、ドナーになるには、命がけの手術を受ける覚悟が要る。そして、ドナーの身体には傷跡だけでなく、好ましくない影響が残る。臓器売買は、主として生活費を補うため、あるいは借金を返済するために開発途上国の貧しい人々が止むを得ず行っているものであり、腎臓についてみても、売る当事者よりも売買を仲介するブローカーの取り分の方が多くなっている。売り手（ドナー）は腎臓の1つを売って得た小金もすぐに使い果たしてしまう。さらに、開発途上国の若い人々の臓器を買うのは欧米や日本など先進国、そしてアラビアの産油国、イスラエルなど豊かな国の年長の人々であり、開発途上国での移植費用は自国内で移植を受けるよりは割安である。こうして臓器は貧しい人・国から豊かな人・国へ、若い健康な人から年長の健康でない人に移動していく。これら豊かな国の人々はお金で貧しい国の人々から命を買っているといえよう。国際的にみれば、臓器という商品は、原料・資源の流れと同じように、開発途上国から先進国へ移動していく。ここにも南北問題が顔を出すのである。さらに、人々の臓器まで商品にして世界市場を形成してしまう資本主義の強欲ぶりを問題視することもできよう。

臓器売買には先述のような倫理的な問題が多々あるので、臓器の売買は殆どの国で公式には禁止され、WHO も国内での移植を原則としている。さらに、仮に臓器売買を公認したとしてもドナーが増えるとは考えられず、移植用臓器の不足は解消されないだろう。だが、禁止されてはいても高額で売買可能な商品ならば、闇市場で取引が行われているのではないか、悪辣なギャングが臓器を取引しているのではないかという疑念は消えない。

本稿では、臓器泥棒の噂を素材として、グローバリゼーションと情報の移動との関連について、考察してみたい。

## 2. 臓器泥棒の噂のグローバル化

1980年代に入り、有力な免疫抑制剤が登場し、脳死の社会的受容が進行するとともに世界各国で臓器移植が広く行われるようになった。移植希望者は増えたが、ドナーは増えず、その結果、移植用臓器の不足という事態が生じた。そして、その頃からある種の噂がよく聞かれるようになった。その噂とは、移植用の臓器として売るために、善良なあるい

は不注意な人々の臓器が盗み取られるという噂である。前節で述べたような事情があるので、自分の臓器が悪辣な人々に狙われているのではないかという不安を感じる人々が少なくないせいであろうか、臓器泥棒の噂は絶えないのである。その噂は、アメリカ、イギリス、日本といった先進国だけでなく、ブラジル、グアテマラ、ペルー、メキシコ、ベトナム、キューバなどの開発途上国においても聞かれ、グローバルな噂となっている。

そして、噂の中で取られる臓器は、腎臓が圧倒的に多い。心臓でも肝臓でも移植に用いられる臓器であれば何でもいいはずであるが、各人に2つずつあって1つだけでも生存が可能な腎臓が、盗みの主要な対象とされている。実際の臓器売買においても腎臓が主要な商品なので、この事情を反映しているのであろう。なお、血液や第6節で検討する脂肪は、厳密に言えば臓器ではないが、これらが奪われるという噂も臓器泥棒の噂と同類のものと考えられるので、これらの噂も含めて考察している。

当節では、世界各国で聞かれた臓器泥棒の噂の言説を紹介してみよう<sup>1)</sup>。

日本① 東京ディズニーランドのトイレで小学校高学年の女兒がいなくなった。両親がディズニーランド側に捜索を依頼、ゲートを封鎖して捜した。挙動のおかしい人が女兒を連れていた。ヘアスプレーで髪を染められ帽子を被らせられたうえ、服も取り替えられていたが、靴で分かった。犯人は東南アジア系で、トイレから出てくるところを突き飛ばし、薬で眠らせた。臓器売買のターゲットにされた。

日本② ある家族が、夏休みにハワイに行った。2人の娘と母親は海に入って遊んでいたが、お父さんはずっとビーチに寝そべっていた。3人がビーチに上がってくると、お父さんの姿が見えない。どこかに買い物に行ったのかと思って待っていたが、帰ってこない。ホテルに戻ったが、やはり帰っていなかった。3人はそのままお父さんの帰りを待ったが、何の連絡もないまま一夜が明けてしまった。警察に届けようというとき、ホテルのすぐ近くの道で倒れているお父さんが見つかった。部屋に連れてきてもらってベッドに寝かせようとする、背中に大きな切り傷があった。40～50センチの長さで、きれいに縫い合わせられている。すぐに病院に連れて行って詳しく検査してもらおうと、腎臓が抜き取られていることがわかった。外国には臓器売買に関する組織があって、観光客を襲って臓器を抜き取り、それを売りに出すそうだ。

モンゴル① 去年、ラジオがモンゴル人の子どもが1人行方不明になっていると報じた。両親も警察も子どもを捜した。長い間、手掛かりは見つからなかった。そして、ある時、誰かが墓地で子どもを発見した。警察の捜査の結果、中国人が犯人だと判明した。彼らは子どもから多くの臓器を切り取り、持ち去ったという。

モンゴル② ある子どもが通りから姿を消した。人々の間で子どもは血を取るために連れ去られたと噂された。年老いた金持ちの中国人はこのやり方で自分たちを若返らせている。モンゴルでは多数の子どもたちが姿を消している。人々は、彼らの腎臓はこれら中

国人のそれと交換するために奪われたと言っている。中国には大金持ちがいる。これらの金持ちで年取った連中はスベアの臓器を必要としている。そして彼らはわれわれの子どもからそれを得ている。私は3年の間、若い人の血は年寄りを若返らせるということを何度も聞いている。

アメリカ① 若い男性のグループがある週末ニューヨークへ遊びに行った。あるバーでその内の1人が1人の女性と仲良くなり、その女性の部屋で一夜を過ごすために仲間と別れた。暫く彼から連絡がなかった。翌日の夕方電話があり、「僕は今あるホテルのある部屋にいると思うんだが、どうも体の調子が悪いので、ここまで助けに来てくれないか」と言った。仲間がホテルの部屋に行ってみると、彼は弱々しくベッドに横たわっていたが、シーツにべったりと血が付いていた。彼の背中には真新しい手術跡があり血が出ていた。あわてて病院に連れて行くと、医師は彼の腎臓の1つが取り去られていることを発見した。彼は薬を飲まされ、闇市場で売るために腎臓を取られたと彼らは結論を下した。

アメリカ② 友人の1人がニューヨークへ行っている女性に出会った。2人はホテルの部屋に行った。彼が気付いた時、公園のベンチの上に寝ていた。苦痛を感じたし頭がぼんやりしていたので病院に運ばれた。彼の腎臓の1つは手術で取られていた。そして、彼は強制的に臓器を提供させる事件の犠牲者だったことが判明した。彼をホテルの部屋へ誘った女性は、看護師だった。彼は意識を失われ、外科医が入ってきて手術した。衣服を着せられ公園に運ばれベンチに放棄された。彼が犠牲者に選ばれたのは、認知の訴訟に巻き込まれ父親が否かの検査を受けたためだった。その検査結果を、腎臓を捜していたある外科医が入手した。外科医は、どうしても腎臓が欲しかった大金持ちの患者から高額の謝礼を受け取った。

アメリカ③ ある友人が、仲間とニューヨーク・マンハッタンのクラブへ遊びに行った。そこで仲間の1人はとても綺麗な女性と出会った。2人は仲良くなり、彼女の部屋に誘われたので、部屋に行った。数日連絡がなかったので心配になった友人は、電話してみた。彼は信じられない話をした。彼女と一緒にクラブを出たことは覚えているが、その後は覚えていない。彼はブロンクスのある安ホテルの一室で血まみれのシーツの中で目を覚ました。背中には縫い目があったので、医者に診てもらった。「君！ 誰の仕業か、君の腎臓は取られているよ。」

イギリス① スコットランドに住んでいるある女性の息子はロンドンに住んでいた。彼が最近引っ越したので母が新しい住居の様子を見に行った。彼の姿がなく、病院に入院したと言われ、その病院へ行くと、彼はひどい状態で通りをさ迷っているところを発見されたと言われた。彼は手術を受けその直後にそこから追い出されたのであった。「息子には悪いところはないし、病気でもないはずですよ。どうして手術を受けたのですか」と訊くと、「彼の腎臓は取られています」と告げられた。彼は魅力的な女性に出会い、彼女の部

屋に連れて行かれ、薬を飲まされた。病院で目を覚ましたが、腎臓は取られていた。手術の手際は見事だったが、追い出すのは早すぎた。ロンドン北部ではこの種の事件はよくある。そこでは腎臓が売られている。

イギリス② イギリスの多国籍企業に勤めているビジネスマンがアメリカに出かけた。彼は、あるバーで一杯飲んだあと、氷の詰まったバスタブの中で裸で目を覚ました。バスタブの縁に携帯電話が置いてあり、彼の胸には「911へ電話せよ」と書かれていた。電話をすると、救急サービスは背中からワイヤーが出ていると感じるかと思ねた。その通りだった。救急は彼の腎臓は専門の臓器ブローカーによって取られたと説明した。この不運な旅行者は、手厚い看護の下で失われた臓器の移植を待っている。

アイルランド① ある夫婦がリオデジャネイロへ出掛けた。到着して間もなく夫が姿を消した。妻は警察や大使館に連絡して夫を捜した。暫く捜したが、お金がなくなったので、妻は帰国した。数週間後、夫はぼーっとした状態でリオの通りをさ迷っているのが発見された。病院へ運ばれ診察を受けたところ、彼の腎臓の1つが失われていたことが判明した。

オーストラリア① 2人のオーストラリア人男性が、休暇でアメリカのロサンゼルスへ行った。ある日の夕方、バーへ飲みに出掛けた。その内の1人はそこで知り合った女性の1人と一緒に過ごすことになり、もう1人はホテルに戻った。友人は数日間帰ってこなかった。彼が現われた時、気分がすぐれないし、何が起こったのか思い出せないと言った。2人は、彼は薬を飲まれ金を盗まれたと考えたが、札入れは無事だった。だが、彼の背中に傷があったので、医者に診てもらった。彼の腎臓の1つがなくなっていることが分かった。

エストニア① ある人々が黒い自動車（記憶ではロシア製のポベダ）で田舎を巡っている。人々を誘拐してその血を吸う。血を吸われた遺体は投げ捨てられ道端に転がっていると言われる。

ポーランド① 1人の牧師が黒いボルガである家にやって来た。尼さんが出てきて方角を教えてくれるよう子どもに頼んだ。子どもが乗り込んで車は走り去った。2日後に子どもの死体が橋の下で発見された。その子の血は抜き取られていた。

ポーランド② 黒いボルガがやって来て子どもたちが誘拐された。子どもたちの血は、特殊な白いタイヤに注入され運ばれた。

ポーランド③ ある城の側に黒いボルガが駐まっていた。何人かの人々が、城、丘、そして多分教会を訪れた。尼さんもいた。彼らは新しく道路を工事していた。そこは荒れ果てているように見えた。そこから遠くない場所で子どもたちが遊んでいた。尼さんは子ど

もの1人を捕まえて空き家に入っていった。男たちがその後に従った。彼らは子どもを連れないうで出てきた。そしてボルボに乗り込んで行ってしまった。その子どもの母親が事態に気がついて、子どもを捜したが、彼は死んでいた。血の抜き取られた死体が残されていた。その血は白血病治療のために西ドイツに運ばれたという。

ブラジル① 青色あるいは黄色の大きなバンが何度も目撃された。その車はアメリカ人あるいは日本人の代理人が運転し、犠牲者を探して都市の貧民街を巡回している。非行少年、ストリートチルドレン、貧しい者、精神病者が主要なターゲットだと言われる。犠牲者はバンの後部に投げ込まれ、その後、解体された遺体が道端、公共墓地、病院のゴミ捨て場で発見される。

ブラジル② ピエロの恰好をした男性2人とバレリーナの服を着た女性1人の3人組の誘拐団が出没している。彼らは子どもを車に誘い込んで殺す。さらには遺体から臓器を抜き取り、移植用としてアメリカなど先進国に売り飛ばすという。

ペルー① 医者のような恰好をし、機関銃を持った白人の男たちが都市の貧しい地区を車で巡り子どもたちを誘拐している。子どもたちは目をえぐり取られてその上に包帯を巻かれ、ポケットに「ありがとう」と書いたメモが入っている。盗まれた目は国家の債務を支払うために売られるという。

グアテマラ① 1人の少年の遺体が道端で発見された。胸が切り裂かれ、心臓や他の臓器は消えていた。胸の空洞の中に、「臓器をありがとう」と書かれた1枚のメモが残されていた。

グアテマラ② 今年始め、赤ん坊の死体が8体発見された。それらの腹部は切り裂かれ、重要な臓器がなくなっていた。腹の内部には100米ドル札と「ご協力ありがとう」というメモが残されていた。

メキシコ① ある行商人が、水漏れするスーツケースをバスに持ち込んだ。怪しいと思ったバスの運転手がそれを開けてみると、その中には子どもの目と腎臓が詰められていて、プラスチック容器に入れられ、溶けた氷で冷やされていた。

メキシコ② 1人の少年が、ある市場で誘拐された。2ヶ月後に同じ場所に姿を現わしたが、背中に切り傷があり、それは彼の腎臓の1つが取られた跡であった。彼が家に帰ってきたとき、2,000米ドルを持っていた。

キューバ① ハバナでは不思議な噂が広まっている。オートバイに乗った男によって母親から子どもが奪われている。その後、内臓が失われた子どもたちの遺体が発見される。お金と「ありがとう」のメモが残されていた。子どもたちの臓器は移植用に盗まれたとも

いう。

ベトナム① ハノイのある地区で、少年を誘拐しようとしたとして、1人の男が地区の人々に捕らえられ、地区人民委員会の建物まで連れてこられた。数千人の地区民は自分たちがその男を処罰したいので引き渡すよう要求した。警察は拒否したが、怒った群衆は石やレンガを投げて暴れた。暴徒を解散させるために、警官約100人が動員された。子どもたちが臓器目当てで誘拐されるという噂が数ヶ月間広まっていた、親たちは誘拐者に注意しており、地区の緊張が高まっていた。2週間前、ハノイ郊外のある地区の共同墓地で臓器のない7人の子どもたちの死体が発見されたという噂が広まっていた。

ドイツ① ブレーメンの夫婦がトルコのイスタンブールへ出かけた。2人は何度か街頭市場をぶらついた。妻が先を歩き夫がついていった。何度目かに妻が振り向いたとき、夫が消えていた。引き返して捜したが見つからず、大使館から警察に連絡してもらったが、手がかりはなかった。数日後、妻に連絡があって、病院に行くように言われた。海岸で意識を失っていた男が運び込まれていた。確かに夫だった。容態が良くなかったので、ブレーメンの病院へ運ばれた。右側の腎臓の位置に新しい縫合跡があった。検査の結果、最近、腎臓が取り去られていた。

オランダ① パリのディズニーランドへ日帰りで遊びに行った両親は、子どもの1人を見失ってしまった。暫くして、その少年はベンチの上に青ざめた顔でぼーっとしているところを発見された。彼の腎臓が抜き取られた背中の部分に大きな傷跡が残されていた。

中国① 2009年4月、広東省河源市では児童失踪事件が頻発した。「子どもの臓器を狙った誘拐だ」という噂が広がり、子どもを持つ親たちは神経をとがらせている。親の目の前で子どもを車に乗せ連れ去る事件も発生している。女兒2人がスクールバスを待っていたところ、突然ワンボックスカーが現われ、中から降りてきた迷彩服姿の男に車の中に押し込まれ連れ去られたという。

スウェーデン① スウェーデンのあるカップルがブラジルに休暇に出掛けた。すると1人の少年が近づいて来て、熱帯雨林伐採に反対する請願の署名に協力するよう頼んできたので応じた。その請願は、実際には、移植のための腎臓ドナーになることに同意するものだった。

イタリア① パレルモとかバリのプティックでショッピングしていた女性が試着室から消えた。彼女たちは秘密の地下室、あるいは店の側に駐車しているトラックに運ばれた。そこには手術の設備があり、臓器が摘出される。ギャングの集団が臓器泥棒を仕切ってい

るという。

イタリア② トリノではある噂が広まっている。ある若い男が美しい女性に呼び止められて、トラックに連れて行かれた。トラックには手術用の設備が整っていて、彼は腎臓を取られた。

### 3. 臓器泥棒の噂と伝説

ところで、前節の臓器泥棒の噂は、実際におきた出来事についての噂ではない、と考えられる。誰かを誘拐して臓器を盗むだけでは、移植は完了しない。だが、臓器泥棒の噂は、臓器の移植に全く言及していない。そして、臓器泥棒の噂が単なる噂と考えられる、もっと決定的な理由がある。臓器移植にはハード・ソフト両面で必要な条件がいくつかあり、それらは簡単に充たせないからである<sup>2)</sup>。さらに、ドナーとレシピエントの血液型と臓器の組織の型も一致しなければならない。そして、臓器泥棒で大きな利益を上げるためには、よほど多数の人々を非自発的ドナー＝犠牲者にしなければならないが、臓器泥棒は勿論犯罪であり、犠牲者＝犯罪の被害が増えるにつれて、犯罪者たちが誘拐、監禁、傷害などの容疑で警察の捜査の対象になる危険も大きくなる。マフィアなどのギャング団が手間隙掛けて自分たちが追及される可能性を高めるようなことを企てるとは到底考えられない。そして、一部の噂が語るように、子どもたちを誘拐して腎臓や目を奪った極悪なギャングが、罪の意識を感じて子どもたちを家まで送り返しさらに謝礼をくれるなどは、全く考えられないことだとすぐわかる。それゆえ、臓器泥棒の噂は、根拠のない噂であり、都市伝説である。

つぎに、これら臓器泥棒の噂は、グローバリゼーションの影響で世界中に広がったのだろうか。ある噂は、土着か伝来か、つまりその土地固有の噂かそれとも外国で広まっていた噂が入ってきてその場所に合うように変容したのだろうか。アメリカ①と③とイギリス①とオーストラリア①のように似通った噂は、伝来だと考えられるし、いずれの噂が先行する噂かは、それぞれの噂の発生時期を比較すれば確定できる筈である。だが、噂の特性として、誰があるいはどこが発生場所か特定するのは容易でなく、発生時点もそう簡単に特定できないのである。ある噂に言及するマスコミの記事を手掛かりにして考察しても問題がある。なぜなら、マスコミがある噂を取り上げるのは、その噂を多くの人々が知った時点であり、通常、噂の初期ではなく拡大期以降なのであるから。

それでは、何か手掛かりはないだろうか。これら一連の噂が都市伝説だとすると、都市伝説の特徴から分析できるので、この観点から考察してみよう。

さて、都市伝説は、友人の友人から聞いた話として、楽しみのために語られるものであるが、誰にでも当てはまる警告のメッセージを含んでいるだけでなく、一定の話の構造を持っている。そこで、都市伝説は、モチーフ（話のネタ）および話の構造、あるいはプロット（筋立て）という2つの観点から分析できる<sup>3)</sup>。都市伝説は、時代や場所を変えなが

らさまざまな話となるが、原話バージョンと派生バージョンはこれらの観点から区別できるのである。例えば、イタリア①は、話の構造からフランスのオルレアン的女性誘拐の噂の変形であることは、明白である。その原話はこうなっていた。オルレアンのブティックの試着室に入った若い女性たちが姿を消してしまう。試着室で睡眠薬が注射され眠らされたあと、地下室に運ばれ、外国の売春街へ売り飛ばされてしまう<sup>4)</sup>。イタリアの噂は、オルレアンの噂と場所等の設定は全く同じで、結末部分だけ臓器取りに変えられている。

とにかく、モチーフと話の構造、これら2点に留意しつつ、前出の噂を分けてみよう。そうすれば、それらが、グローバリゼーションの産物か否かも判明するだろう。

アメリカ①から③、イギリス①、オーストラリア①は、ある場所で美女の誘惑に乗った不注意な犠牲者が（酒に混ぜられた）薬を飲まされて意識不明となり、朦朧として出血した状態で発見されるが、腎臓が盗られていた、という話のモチーフと話の構造は共通である。これらの噂は、さらに都市伝説の特徴として、おいしい誘惑には落とし穴・罠があるので気をつけろという警告も伝えている。イタリア②に犠牲者が目を覚ました場面は出てこないが、話の構造からこの仲間といえる。イギリス②には美女の誘惑は出て来ないが、やはりこの都市伝説の変形と考えられる。氷の詰まったバスタブという設定は話に真実らしさを付加している。そして、薬を飲まされて大事な臓器を奪われるという話の構造は、オルレアンの噂のそれとも共通である。

ところがこれらの都市伝説には原型があり、それが進化したと考えられる<sup>5)</sup>。一番古い話は、外国の街で給料をもらったばかりの船員が酒場に一杯飲みに出かけ、そこで美女に誘惑され酔っ払って記憶をなくし、翌日、二日酔いで目を覚ましたが、美女は彼の財布と服を持ち去っていて、彼は美女の服を着て一文無しで帰ってきたというものである。それが、1950年代から70年代にはビジネスマンがバーで一杯飲んだ後、町の大広場で裸で（一文無しになって）目を覚ますという話になり、1980年代には、ある有名なホラー話に変化した。それは、こういう話であった。ある都市のとあるバーへ仲間と飲みに行った1人の男性が、1人の美女と仲良くなり、楽しい一夜を過ごした。翌日、彼が目を覚ますと美女は姿を消していた。そして、彼が洗面所に行くと、その鏡の上に赤い口紅で「エイズの世界へようこそ！」と書いてあった。この都市伝説と、アメリカその他の国の美女の誘惑に乗って臓器を盗まれる噂とは、話のモチーフと構造が同じなので、先述の原話が時代状況に合わせて進化してきたといえよう。

そして、イギリス②はオーストラリア①と共通要素を持っている。それは、事件の起こる場所である。オーストラリアの噂の犠牲者はアメリカのロサンゼルスで美女の誘惑に遭っているし、イギリスの噂はアメリカとだけ言及している。これらの都市伝説は、前出の警告に加えて、事情のよくわからない外国は危険だから注意せよという警告メッセージを伝えている。しかし、危険な外国というモチーフは、やはり都市伝説の定番であり、日本②、アイルランド①、ドイツ①、スウェーデン①にも見られる。ヨーロッパ人は、ブラジルやトルコを危険な国だと感じている。オランダ①もここに入る。だが、ディズニール

ンドのようなテーマパークやショッピングモールで子どもが誘拐されるというのも都市伝説の定番であり、臓器泥棒の要素が付け加わったと考えられる。それは日本①ともなった。

そして、注目されるのは、臓器泥棒が、外国人あるいはその代理人とされている噂が目立つことである。日本の噂では東南アジア系、モンゴルのそれでは中国人、ブラジルではアメリカ人あるいは日本人の代理人とされ、明示されない場合も、ポーランドの噂のボルガ（ロシア製）や米ドル札によって間接的に外国人、あるいは外国人との関連が示唆されている。臓器の行き先を外国とする噂もあり、イギリスの別の噂では医者アジア系とされている。これらの噂こそグローバル化の影響を暗示するものかもしれない。だが、実はポーランドの噂は1970年代、モンゴルのそれも1980年代の噂であり、悪辣な外国人というテーマも都市伝説の定番なのである。

さらに目に付くのが、車に乗った犯人が子どもを誘拐して臓器を取るという噂である。エストニア、ポーランド、ブラジル、ペルー、中国、といった各国に広まっている。キューバではオートバイに変わっているが、ここに入れていいだろう。誘拐の目的が臓器取りか否か明らかではないが、車に乗った男が子どもを誘拐するという噂は他にも目に付く。つぎのような例がある<sup>6)</sup>。

イタリア③ 黒い救急車がボローニャの通りを走り回って、子どもたちをさらっている。

イタリア④ 憲兵の恰好をした男たちに伴われた看護師の恰好をした女たちが、両親が怪我をしたと言って、子どもたちを救急車に誘いこんでいる。

コートジボワール① 首都アビジャンの労働者住宅街で、車に乗った2人の男たちが誘拐犯と疑われて、怒った群集に殺され、他の車に乗ったもう1人の男と警官4人が負傷した。薄い色付きガラスの4輪駆動車に乗った男たちが、多数の子どもたちを誘拐しているという噂が広まっていた。

ホンジュラス① ピエロの恰好をしてボルボに乗っている人々が子どもを誘拐している(60人のピエロが噂に抗議するために公然と衣装を燃やしたという)。

ホンジュラス② 「殺しのピエロ」が町の通りを乗用車あるいは救急車で回って子どもたちを誘拐している。

オーストラリア② 近年、多くのメディアが、バンに乗った男たちが通りから子どもたちを誘拐しようとしていると報道した結果、親たちを大きな恐怖に陥らせている。しかし、犯罪学者は、大部分の記事は誤りで、白いバンの男は都市伝説になっているという。

車はどこにでも出沒できるし、密室で誘拐しても犯行を隠しやすい。犯行後逃亡するのにも便利な交通手段である。外国製の高級車やバンといった大型車も中に秘密の手術室がありそうに思わせる。救急車もこの連想から出たものであろう。これらの似通った噂は、グローバリゼーションによって広がったと考えるのにふさわしいと思われる。だが、ポーランドの「黒いボルガ」という都市伝説には、先行する伝説があることが伝説の研究者から指摘されている。それは、「アントワープの血塗られた馬車」という伝説である。

これは4頭立ての美しい馬車だ。その中に華美な衣装の女性が1人乗っている。その女性は、晩くなってもまだ通りで遊んでいる子どもたちを誘うために、沢山の砂糖菓子やおいしいものを持っている。そして、彼女は、お城に来たら幼い娘を遊び相手に出来ると子どもたちに約束する。そのペテンに失敗するや、子どもたちが叫び声をあげないように口を押さえながら、力づくで馬車の中に子どもたちを引きずり込む。その後、可愛そうな子どもたちを遠くにある、彼女の大きなお城に連れて行く。そこで、子どもたちは足の爪先を切断されて血が取られ、苦しみながら死ぬ。子どもたちの血は、偉大な王が入浴治療するために使われる。王は、由々しい病気に罹っている。……子どもたちは7歳未満でなくてはならない<sup>7)</sup>。

車に乗った犯人が子どもたちを誘拐するという一連の噂は、誘拐の目的こそ、難病治療用の血液を採取するためから移植用の臓器を採取するために変わっているものの、この伝説から話のモチーフとその構造を受け継いでいる。前出のポーランド③の荒唐無稽な噂もこの伝説の変形だとわかれば、都市伝説だと理解できよう。また、怪しい馬車に注意せよという警告も怪しい車に気をつけろというメッセージに変えられて伝えられている。

臓器泥棒の噂の多くは、臓器移植のグローバル化とともに、人々の身体に対する不安が高まり、過去の伝説が呼び起こされて生まれた都市伝説であると考えられる。

#### 4. グローバリゼーションと臓器泥棒の噂

それでは、臓器泥棒の噂の中で、ある噂が世界中に広まった、噂のグローバリゼーションの例はないのかといえば、1つある。それは、グアテマラ、ホンジュラス、メキシコ、ブラジルなどの中南米の子どもたちが売買され、あるいは誘拐されて、アメリカに送られて、金持ちの子どものための臓器ドナーにされている、という噂である。

その噂は、つぎのような経緯で広がった。1987年のある時、中南米の数ヶ国で国際養子を持っている子どもたちを多数集めている秘密の「赤ちゃん農場」が連続して発見された。子どもたちは、不正な手段により、また、売買されたり、誘拐されたりして集められたと考えられた。これらの子どもたちの運命は、先進国に送られて臓器を必要としている金持ちの子ども用のドナーにされることではないのかという不安を福祉・警察関係者が口

にした。その発言を海外メディアが取り上げた。その直後、先の発言は単なる憶測に過ぎないと発言者の上司によって打ち消されたが、海外メディアは打消しは報道しなかった。

フランス、スペイン、イギリス、カナダなどでは中南米の状況を報じる「臓器泥棒」「ボディパーツ・ビジネス」というようなドキュメンタリー番組が放送され、噂に信憑性が与えられた。多くの人々が放送を見た。番組には視力を失った子どもが出てきて、ある病院で目を取られたと語り、同情を誘った。（後の調査では、実際は病気によって目が見えなくなっていたこと、謝礼を貰って目を取られたと証言していたことが判明した。）この反米的内容の噂は、当時アメリカと対抗していた旧ソ連のメディアと通信社によって全世界へ大々的に伝えられ、開発途上国、アメリカに批判的な国際組織・人権団体ではこの噂は真実と受け止められた。1993年、EU 議会でも臓器売買を非難する決議案が共産党に近い議員から提案され決議された。アメリカ情報局はディスインフォームーションの専門家を立ててこの反米的な噂を打ち消そうとしたが、その噂は90年代半ばまで全世界に流通していた。以上のような噂の流通過程は、フランスの都市伝説研究家とアメリカ情報局の調査の結果、確認されている<sup>8)</sup>。

この噂が世界中に広がり、一部の人々からは真実だと受け止められたのは、開発途上国の典型と考えられる中南米諸国の事情が背景にあったためと考えられる。この地域では強権政治が行われ、政治的軍事的テロが続いていた。軍事独裁政権に反対する人々が弾圧され、誘拐と拷問も珍しくなく、一般的な暴力は日常的で、誘拐、殺人などの事件が頻発していた。ストリートチルドレンも保護されず、貧しい人々は病院に行っても十分な治療を受けられず、医療機関が遺体から臓器を密かに取り出して売買することも珍しくなかった。検視死体から臓器が摘出されていた。人々の身体の安全に対する保証はなかった<sup>9)</sup>。また、これらの国々では、子どものたちの誘拐は珍しくなく、子どもを放棄したり養子に出したり、金のために売る親も少なくなかった。アメリカやヨーロッパへの養子縁組も普通に行われていた。そして、外国に養子に出された子どもたちの運命にも不安は消えなかった。さらに、臓器売買も行われていた。国際養子縁組と臓器売買、これら2つが結びついた事態が起きても何ら不思議ではないと人々は考えた。さらに、噂のきっかけとなる「赤ちゃん農場」の発見があり、先述の噂が生まれたと考えられる。

そして、第2節の子どもたちが臓器を奪われるが、米ドル札の謝礼や感謝のメモがあったというグアテマラ、メキシコ、ペルー、キューバの噂（これらはモチーフと話の構造が共通なので、いずれかの噂が中南米各国に広がったものであることは確かである）もこの噂の1種であり、前出のブラジルとメキシコの噂もこの部類に入る。

当事者にとってある事柄が重要であり、十分な情報がなく曖昧な状態であるという噂の流布する条件が備わっており、さらに不安という条件も加わったので、この噂は多くの人々に受け入れられたのであった<sup>10)</sup>。

ここで視点を変えて、グローバリゼーションが引き起こした、この種の噂について事例研究を試みたい。資本主義が世界中に浸透してある地域に貨幣経済が導入され、経済のシ

システムが変わり、ある地域の人々の生活に大きな変化がもたらされ、その結果、これから先の生活の見通しがつかないという曖昧さが生じ、生活がどうなるのかに対する人々の不安が高まったとしたら、なんらかの噂が発生するというのが、噂研究の知見である。

次節以下では、資本主義システムとそれ以外の経済システムの国・地域との接触によって生じた血取り、脂肪取りの噂を考察する。

## 5. アフリカの吸血鬼の噂

アフリカ中部から南部にかけての地域、ケニア、タンザニア、コンゴ、マラウイ、ジンバブエ、南アフリカなどにおいて、白人とその協力者を吸血鬼と見なす原住民の噂が広く聞かれる。白人の人類学者、地質学者、病理学者、鉱山技師、神父など、さらには現地人の消防士、警官などもアフリカ人の血を吸うといわれる。これらの噂の中で吸血鬼は地域ごとに、ムミアニ、パニャマ、カチンジャなどと呼ばれている。そして、吸血鬼の噂は、植民地時代に聞かれ始めたが、植民地から独立した後も、さらに21世紀に入ってから聞かれるので、過去のものではない。何故、アフリカの植民地の被支配者は、そして独立後の市民も、支配者とその手先を吸血鬼と見ているのだろうか。

独立後の1968年に、タンザニアのある農村でフィールドワークを始めたアメリカの人類学者アレックスは以下の②の噂を採集した。そして同じタンザニア東部でより近年、オランダの人類学者ペルスも自分が原住民から吸血者と呼ばれていることを知った<sup>11)</sup>。以下、①は1950年代（植民地時代）の噂、③は1990年頃トランスバール（現南アフリカ北東部）の噂、④は2002年末マラウイの噂である<sup>12)</sup>。

①ケニアのキスムとプシアを結ぶハイウェイを複数の赤い色の車が毎晩往復している。1人で歩いている者を見つけると、キスムに向かう途中のある場所へ連れて行き、彼らの血を抜いてから死体を放置してしまう。この血液はその後病院の血液銀行に運ばれる。特定の著名な人々が地域的な噂の中でカチンジャと呼ばれている。

②その噂は、犠牲者（アフリカ原住民）が気絶させられ、逆さ吊りにされ、頸部の切り口からバケツに血が滴り落ちる様子を、目に見えるように描写している。続いて、消防車がこの液体を町の病院へ運び、そこで液体は赤いカプセルにされる。そしてヨーロッパ人はこの錠剤を定期的に飲むのである。これを飲まないヨーロッパ人はアフリカでは生きていけないのだ。

③吸血鬼の消防士が赤いコンビバンで走り回って、疑いを持たない犠牲者を捜している。薬を飲ませて殺し、血を吸い取る。また、臓器を魔術師の祈禱に用いるため、あるいは血と臓器を移植などのために地方の公共病院に売るために取る。

④吸血鬼は注射器を持ち催眠ガスで犠牲者を眠らせて血を吸い取る。マラウイ政府は、国際援助機関の食糧と交換するために吸血鬼と共謀して人々の血を集めている。この噂

が、暴力行為を引き起こしている。先週南部の村で吸血鬼を手助けしていると疑われたある男が村人たちに投石されて殺され、吸血行為を疑われた3人のカトリック神父はひどく殴られた。大統領はこの噂は悪意のあるもので、反対派が政府の権威を低下させようとしてこの噂を流していると非難した。

アフリカの植民地において白人は、絶対的な力を持っていたし、彼らはあまり働いていないように見えないのに豊かな暮らしを送り、原住民はあくせく働いているのに貧しいのは、不思議であった。そして、白人の重病人は本国で治療を受けるためにいなくなるので、白人には病人は見られず、彼らは常に健康に見えたとし、働き盛りの人々が多く、老人は少なかった。このような白人の不思議な力は、原住民の血を飲むことで得られると考えられた<sup>13)</sup>。原住民の血液から出来ている万能薬のカプセルを飲んでいるから白人は身体には厳しい気候条件のアフリカでも健康に生きていけるのである。現にアフリカでは魔術師が血を加えて秘薬を作っていた。また、白人は、実際は赤ワインを飲んでいたが、血を好んで飲んでいるように見えた。さらに、白人は原住民を刑務所に送ったり病院に入院させたりする権力をもっていた。そして、刑務所や病院に送られた人々の全員は帰ってこなかったもので、白人は原住民を食べていると考えられた<sup>14)</sup>。

このほかにも状況証拠があった。白人は、原住民からよく血を採った。黄熱病や風土病の検査のため、健康診断のため、そして戦争中は戦場で負傷した兵士の輸血に用いるため、採血という新しい経験を原住民に押し付けたが、これはまさに噂を裏付けるものであった。西ケニアの農村の小学校で児童の寄生虫や栄養状態について調査するため血液を集めた公衆衛生研究者はカチンジャと呼ばれた<sup>15)</sup>。さらに、アフリカでは救急車が足りなかったので、消防車が代わりに血液を運んだ。消防車の赤い色も血を連想させた。現地では火事が少ないのに消防車が常駐し、消防士たちが訓練を熱心に繰り返しているのも不思議に見えた。彼らの本当の仕事は何か。原住民から消防士の候補者を集めるために消防士たちが夜間暗闇で待ち伏せしてむりやり原住民を連れて去った事例も少なくなかったので、誘拐する消防士という告発はまったく根拠がないわけではない。噂では犠牲者は地下室に逆さ吊りにされ、血が抜き取られる。そこで、消防士も吸血鬼とされた<sup>16)</sup>。

さらに、噂では犠牲者は車に連れ込まれて遠くへ運ばれ血が抜き取られるので、自動車は怪しまれた。赤い車、後部がピカピカ光る金属で覆われたランドローバー、そして、ライトを消した窓のない車はとくに怪しまれた。現地では車は消防と警察だけが持っていたので、警官も吸血鬼にされた。窓にカーテンの懸かったトラックに乗ってきて現地調査していた白人の地質学者は原住民に襲われた。近年は犠牲者の血を抜き取る間大人しくさせておくため特製の罠（シートベルト？）の付いた車もあるという<sup>17)</sup>。

神父、中でも「アフリカ伝道者協会」別名ホワイト・ファーザーズと呼ばれるカトリックの一派が糾弾された。長い髭の肥った神父が吸血鬼と怪しまれた。彼らは現地の協力者に十分な給料を払わなかったし、聖餐用のパンと赤ワインも誤解を招いたと考えられる<sup>18)</sup>。

アフリカ原住民が白人や外国人、そしてその協力者を吸血鬼だという噂は、何を意味しているのだろうか。原住民から見ると、白人が常に存在すること、そしてアフリカで白人が絶対的な力を持っていること、さらに、植民地から独立しても状況は変わらない、といった状況があった。そこから、白人が原住民を犠牲にしている、白人はアフリカ人から生命力＝血を奪っているという噂が生じた。この噂は、植民地の人々の自分たちの生命力が奪われているという感情を表現していると考えられる。この噂は、植民地時代は、アフリカの資源が外国人の利益のために吸い取られている、これがアフリカ人協力者によって可能になっている、さらに人々の間に貧富の差、不平等を生じさせているという人々の認識を表現していたと考えられる。独立後はアフリカ人の指導者とその仲間が、稀少な資源を浪費することで、国家、そして間接的に国民を食っているという感情を表現している<sup>19)</sup>。そこで、政敵を吸血鬼として非難する④のような噂が21世紀に入っても政治の武器として用いられているのである。さらに、この噂は国際機関に言及することで、世界資本主義システムとの関係を暗示している。

## 6. アンデスのピシュタコの噂

南米ペルー、ボリビアのアンデス山地にはピシュタコと呼ばれる悪魔が出没し、先住民インディオの脂肪を奪い取って殺すといわれる。ピシュタコは架空の存在ではなく、実際に殺人事件を起こしているとされ<sup>20)</sup>、ピシュタコと疑われた外国人が現地人から暴力を振るわれる事件も起きている。外部の人間には全く理解できないピシュタコの噂をインディオたちは（さらには現地の他の人々も）信じている。ピシュタコの噂の言説の中に彼らの世界観が表現されていると考えられるので、ここで取り上げてみたい。

ピシュタコは最近になって生まれたのではなく、スペイン人のインカ征服の時代から知られていた。ナカック、カリシリ、カリカリ等の別称ももつが、首を切って屠殺する人という意味を持っている<sup>21)</sup>。ピシュタコの噂は色々聞かれるが、基本要素は同じなので、いくつかの例を挙げてみよう<sup>22)</sup>。

①馬に跨り、乗馬服を着、白い帽子を被り、その姿は優雅で目が眩むようだ。馬も美しく飾られている。……彼は犠牲者に催眠剤を吹きかける。女性は震えだし、逃れられなくなって彼に向かう。彼の傍らに来ると崩れ落ちて深い眠りに陥る。すぐにピシュタコはお尻に管を刺す。その管は脂肪を入れる容器に繋がっていて、上手に脂肪を吸い出す。作業が終わると、彼女をぴしゃりと打つ。犠牲者はその身に何が起きたか知らないまま目覚める。身体にはっきりした痕跡は残らないが、被害は取り返しがつかない。15日か20日以内に彼女は死んでしまう。

②ピシュタコは裕福な階級に属している。大土地所有者であったり、実業家であったりする。長いポンチョを纏い、つばの広い帽子を被って出てくる。ピシュタコは夜、十字路

や橋の下、道端でインディオを襲う。サーベルのようなもので被害者の首を切り、その身体から脂肪を抜き取る。取った脂肪は売り飛ばし、それは工場で機械を作ったり、金属を保存したりするのに使われる。

③ピスタコはグリンゴで、長髪をしており、膝まである外套を着ていて、ブーツを履いており、ナイフと武器とピストルを持っていました。ピスタコは夕暮れに畑の中を果物を採りながら歩き、夜歩いている人やテルコは皆殺しにしようと言われています。いつも脂肪を取りますが、これは大統領の許可を得て外国に持っていくために違いありません。

ピシュタコは、近年は馬でなく、メルセデス・ベンツとかSUVに乗っているし、革のジャケットを着て、キラキラ輝くサングラスをかけたり、白い医療用の服や軍服を着たりしている。時代状況に合わせてピシュタコ像は変化しているのである。それでもピシュタコのイメージの共通要素を挙げてみれば、以下のような事柄が挙げられる<sup>23)</sup>。

- (1) ピシュタコは、白人か白人と先住民との混血のメソチーソの男性である。
- (2) ピシュタコは、夕刻、真夜中に人気のない村はずれ、十字路、橋などに現われる。
- (3) ピシュタコは、首を切り落とし死体を逆さ吊りにして、血や脂肪を取る。
- (4) ピシュタコは、白人の脂肪は取らないが、先住民の脂肪は取る。先住民の脂肪は白人のそれよりも上質だから。
- (5) ピシュタコは、採取した脂肪を都市の住民や政府、外国人に売り、財を蓄えている。
- (6) 売られた脂肪は、鐘の鋳造や聖人像を磨くワックス、機関車、機械、ロケットなどの燃料、薬の原料、に用いられる。

中南米研究者の加藤隆活は、ピシュタコの言説に、「神秘的な登場人物が脂肪を狙って人を殺めること、さらにその脂肪がわれわれの常識を越えた用途に用いられる」という2つの基本的モチーフを見出している<sup>24)</sup>。同じく、中南米研究者の谷口智子は、ピシュタコの言説に共通する特徴として、(1)首切り魔、(2)脂肪を取るもの、(3)よそ者、あるいは村の倫理に従わない者、といった3つの特徴を挙げている<sup>25)</sup>。

これらのピシュタコの重要な特徴について考察してみよう。まず、ピシュタコが取るのは、脂肪であり、それが何を意味するのかを考えなければならない。しかも、アンデスの高地における脂肪の意味を考慮に入れて、その意味を解釈しなければならない。アンデスでは、血液と脂肪は、神聖な力に捧げられる重要な供物となっているので、脂肪は血液と同じだと解釈することもできるが、寒冷なアンデス高地においては、体温維持のため脂肪は不可欠である。同地では肥っている人が健康な人であり、脂肪を取られることは死に直結する。ピシュタコは、原住民の生命力と健康を奪っている<sup>26)</sup>。そして、ピシュタコは、グリンゴ（白い人）とされており、白人かメソチーソが連想される。アメリカ、ドイツ、日本から医療器具を輸入したり、テープレコーダー、カメラ、コンピューターなど、外国人の用いる道具を使用していること、彼の乗っている、かつての馬、現在の外国製の車

も、彼が外国人であることを連想させる<sup>27)</sup>。しかもピシュタコは先住民から脂肪を取るが、白人からは取らない。この噂は、白人＝ピシュタコによってインディオの大切なものが奪われていると、収奪関係を表わしている。ピシュタコが首を切るというのは文字通り死を表している。被害者は脂肪を取られたことは取られた直後には気がつかず、それでも取り戻すことができなくてやがて死んでしまうという言説は、この収奪をインディオがどうとらえているか表現しているとも読める。(なお、死を免れるためには、奪われた脂肪を回復することが必要だとされる。) また、ピシュタコは、ナイフ、なた、小銃、機関銃などでインディオを襲って殺しているが、彼らに加えられた生々しい暴力が感じられる。ピシュタコは、先住民にとってコントロールできない圧倒的な力を持っている。

つぎに、ピシュタコは、インディオから脂肪を取るが、その目的は自ら消費するためではなく、都市の住民や政府に売るためである。これは何を意味するのか。加藤は、ピシュタコを農村社会と都市社会との媒介者として捉えている。ピシュタコはインディオから見た内の世界と外の世界とを媒介する。現地では、自給自足が原則で貧富の差の小さい貧しい農村社会と貨幣経済が発達し豊かだが経済格差の大きな都市社会という大きな対比がある。アンデス高地に暮らしている貧しいインディオから見れば、白人、メソチーソは、都市社会に属する豊かな人々である。ピシュタコは、インディオから脂肪を奪いとり、都市の消費者に売って、お金を得ている。それゆえ、ピシュタコは金持ちである。脂肪は農村から都市に向かって行くが、その対価であるお金はピシュタコの手に入り、農民まで届かないのである。ここには都市社会による農村社会の一方的な収奪関係が表現されている。都市は農村を収奪するだけで、対価はもたらされない。そして、再び脂肪が取られることで、ますます農村は貧困化し、都市はより一層豊かになる。「村落の弱体化と都市の強化」を表象するプロセスが含意されている<sup>28)</sup>。

だが、被征服民インディオは、ピシュタコの噂という対抗神話によって、支配者＝白人および西洋人とそのシステムを悪魔的なものとして批判しているだけではない。噂の中でピシュタコを殺して、象徴的に復讐している<sup>29)</sup>。また、ピシュタコと目された人々は攻撃され、共同体から排除される。原住民から富を奪ってにわかに豊かになったと考えられる者、外国人、外部社会から送り込まれた人々は、共同体から排除され、共同体の秩序は回復される。

そして、脂肪の用途であるが、鐘の鑄造に用いれば鐘の音が良くなり、脂肪で聖人像を磨けばより光り輝くというのは、かつてアンデス山地をベツレヘム会の修道士たちが巡回し教会修復のための寄付を集めていたことと関係がある。薬の原料というのは、スペイン人は薬の原料として用いるためにインディオの脂肪を取りに来たと信じられている<sup>30)</sup> ことと関係がある。興味深いのは、機械の潤滑油、機関車、ロケットなどの燃料として、脂肪が用いられているという言説である。インディオから取られた脂肪は、重機や機関車を滑らかに動かすことで先進国の産業革命に貢献し、今でも産業機械、自動車、そしてコンピューターの潤滑油として使われている<sup>31)</sup>。アメリカの1960年代の月面着陸成功もイン

ディオの子どもの肉から造られた燃料の力によるものとされる<sup>32)</sup>。ここに彼らと資本主義との関係が表わされている。彼らの貢献・犠牲なしには資本主義はうまく機能しない、と彼らは考えている。そして、インディオから取られた脂肪が、国の対外的債務の代償として、外国に転売される、という言説に世界経済との関連が明示されている。その意識は、ピシュタコの行為を大統領が許可しているとかある地区に政府がピシュタコを送り込んだとかいう言説にも反映している。さらに、政府は自分たちと利害を異にする、というインディオの意識も表れている。実際、インディオは国内で2等国民扱いをうけて抑圧と差別の対象になっている。

それでは、ピシュタコは、単に、夜間1人で出歩くことを控えるべき、非常に恐ろしい忌避すべき存在なのか。そうともいえない。あるインディオの青年はピシュタコの乗っている車、彼の体現している力強い白人の男らしさを理想化していたと報告されている。いずれも彼にとって入手できない外部世界のものを表わしている。「ナカックについての全ては、持ち物を含めて、非常に恐れられる、しかし切望される、そして獲得できない、彼の状態を要約している<sup>33)</sup>。」ピシュタコに象徴される外部の資本主義は、アンデスの原住民に破壊的な打撃を与えている忌避すべきものであるが、地域経済に食い込んできた資本主義の力に魅力を感じる原住民も出ている。

近年、原住民がペルーの首都リマ近辺に移住するとともにピシュタコも彼らを追いかけてきて、新しい噂が広まった。サカオホス（目を奪う者）と呼ばれるグリンゴの悪魔が子どもたちの眼を奪っているという噂である。この噂（第2節のペルー①がこれである。）は、ピシュタコの噂と周辺国で子どもの臓器が奪われるという噂が合わさって生じたとも考えられる。この噂はどのようなメッセージを伝えているのだろうか。目が奪われるということは新しい知識の獲得が困難になること<sup>34)</sup>、教育を受けて、希望する職業に就くのが難しくなることを意味している。特に子どもの目が奪われるというのは、子どもたちが教育を受けることが困難で、子どもたちの将来が絶望的だという人々の不安を表している。

「ピシュタコは、他者がアンデスの人々に加えてきた暴力と結びついた他者表象である<sup>35)</sup>。」ピシュタコの噂はアンデスの人々の異質な他者に対する恐怖、不安から生まれているが、植民地支配、その後の国民国家形成、そしてグローバル化の中で彼らに加えられた暴力を色濃く反映していると考えられる。

## 7. 終わりに

単なる噂、楽しみのための都市伝説というと、全く無害なコミュニケーション行為のように聞こえるが、この種の噂がもとでモブが形成され、噂の中で臓器を盗み取る犯人と疑われた外国人が、現地の人々に襲撃される事件が発生することもある。これもグローバル化の引き起こした一つの現象であろう。

古い例では、天津教案がある<sup>36)</sup>。中国（清）では1857年のアロー戦争の翌年、英露米仏

との間に天津条約が結ばれ、キリスト教の布教が公認され宣教師の保護が定められたが、伝統的な儒教信仰をもつ人々はキリスト教の浸透に反発し、紛争が各地で発生した。1860年、英仏露との間に北京条約が結ばれ、天津など3港が開港し、天津には領事館、租界が設けられた。フランスは望海楼とそれに隣接する寺院跡を永久租借し、望海楼は領事館にした。寺院跡に1869年、カトリックの教会堂が建てられた。シスターたちは「仁慈堂」という社会福祉施設を設け、孤児の収容や診察・施薬などを行った。現地の人々は外国の施設に孤児を送らなかったのも、孤児を連れてきた者にはお金を与えたが、悪人に誘拐を奨める結果ともなった。1870年は日照りのため種まきが遅れ人心は不安になっていた。疫病が流行し孤児院でも死者が多かった。高い塀と閉じられた門の中で外国人は子どもに魔法をかけ、薬を作るためにその身体を切断し心臓や目を取り出しているという噂が広がった。公共墓地に子どもの死体が捨てられているとか、その死体は教会が捨てたものだという噂もあった。6月18日、誘拐犯が逮捕され孤児院の門番に子どもを売ったと告白したので、緊張が高まった。犯人を教会に連行して調べたものの事の真相は不明だった。19日、様子を見にやってきた野次馬と教会の者とは喧嘩を始めると武官が来て収めたが、知県は群衆を解散させられなかった。仏領事は興奮しており、従者に知県を撃てと命じた。興奮した群衆は領事と秘書を殺した。さらに群衆は、教会堂、仁慈堂などを襲撃し、10人のシスター、2人の神父、2人の仏領事館員を含む21人の外国人、30～40人のカトリック転向者を殺戮し、仏領事館、英、米の教会も焼き討ちした。フランスは軍艦を天津に派遣し、清に騒動の首謀者の処罰と補償を要求した。

それから1世紀以上経った中米のグアテマラで外国人襲撃事件が起きた。第2節で紹介した噂の他に、アメリカ人が来て子どもを誘拐し重要な臓器を取り出しアメリカで移植するために送っているという噂が広がっていた。1994年3月8日、ニューメキシコから来た米人女性が南部のある村で、子どもを誘拐しようとしたという村人の訴えで地元警察に逮捕された。村人が見に来た時、彼女は留置所にはいなかった。警察により他へ移されていた。村人は彼女が釈放されると怒り、留置所をくまなく捜して放火した。警官隊、さらに装甲車が投入された。彼女は証拠不十分で釈放されるまで2週間近く拘留された。その10日前、他の地域でスイスの火山学者が子どもを盗んだといって村人たちに攻撃される事件も起きていた。3月29日、アラスカから来て北部の農村を訪ねた米人女性が村人に攻撃された。彼女はその日の朝、村の子どもたちに声をかけた。2人の男が彼女のあとをつけた。地元の女性が、イースターウィークの雑踏の中で8歳の子どもの姿が見えなくなると叫んだ。村人が彼女を取り囲んで子どもを誘拐したと非難した。彼女が逃げようとした時、例の2人によって地区事務所に連行された。24人の警官が催涙ガスを使い、子どもが姿を現わしても、1,000人以上の群衆は鎮まらなかった。建物を取り囲み、「彼女は子ども誘拐犯だ、彼女に死を」と要求した。群衆は投石し、斧で建物のドアを壊し、火を放った。巡査部長は自分が人質になるから彼女を解放してくれと言ったが、白人の血が求められた。彼女は建物から引っ張り出され、棒と金属パイプで殴られ、両腕を骨折し、頭蓋骨

陥没の重傷を負い意識不明に陥った。巡査部長は彼女が死んだと嘘をついて、群衆は「死体」を片付けることを認めた。彼女は米軍ヘリコプターで首都の病院に、その後アラスカへ運ばれたが、意識は戻っていない<sup>37)</sup>。

そして、2000年4月29日、マヤ遺跡などを巡るツアーに参加してグアテマラ西部の秘境の村に来ていた観光客が地元民に襲われた。現地の市場で子どもの写真を撮影していた23人のツアー客を約500人の地元民が投石や棒で襲撃し、日本人観光客とグアテマラ人運転手の2人が死亡した。当時「悪魔を信奉するカルト集団が臓器を生け贄としてささげるために子どもを攫いに来る」という噂が流れていたという。住民の中に一行が子どもを攫いに来たと勘違いした者がいて子どもが奪われるのを防ぐためにバスに投石したという。中南米では子どもの誘拐・行方不明事件が頻発し、子どもの写真は不法な子ども取引の材料にされる場合があり、現地の人々は子どもが盗まれる事件には神経をとがらせ、外国人に警戒心を強めていた<sup>38)</sup> という。

グアテマラではその後も、子どもが誘拐されその臓器が移植用に売られるという強い不安が持続されていて、誘拐犯とされた人々に対する群衆のリンチ事件が頻発している<sup>39)</sup>。

外国人が子どもを誘拐して臓器を奪うという噂は、グローバリゼーションの進行によって子どもたちが世界資本主義の中枢の人々の犠牲になっていると訴えている。どの民族にとっても子どもは宝物であり、子どもが奪われるということは未来の成員、労働力を奪われることを意味する。この噂は、国際養子＝外国人に子どもたちが奪われることで自分たちの未来が奪われる、危うくなっているという意識を表現している。こうした意識は、生活が貧しくて国際養子を多く送り出している中南米諸国<sup>40)</sup> で強く持たれていて、子どもたちを奪っていく外国人に対する怒りを爆発させているが、先進国においても子取りの噂の中では外国人が誘拐犯とされている。先進国では何らかのきっかけで爆発するほど外国人に対する反感は高まっていないが、人々の意識の深層にマグマは存在している。

#### 注

1) それぞれの噂の出典は以下の通りである。

日本①『東京新聞』1997年1月13日。

日本②宇佐和通『都市伝説の正体』祥伝社、2009、pp.214-5。

モンゴル①② D. Czubala, *Mongolian Contemporary Legends*, *FOAFtale News* no.29, 1993, p.4.

アメリカ① J. プルンヴァン (行方均訳)『赤ちゃん列車が行く』新宿書房、1997、pp.188-89。

アメリカ② *More Stolen Body Organs*, *FOAFtale News* no.23, 1991, pp.6-7。

アメリカ③ D. V. Goska, “Waking up Less Than Whole”: The Female Perpetrator in Male Victim Kidney Theft Legends, *Southern Folklore* vol.LIV no.3, 1997, p.196。

イギリス① G. Bennett, *Bodies : Sex, Violence, Disease, and Death in Contemporary Legend*, University Press of Mississippi, 2005, p.201。

イギリス② *Evolving Kidney Theft*, *FOAFtale News* no.43, 1998, p.17。

- アイルランド① G. Bennett, op. cit. p.201.
- オーストラリア① M. Moravec, Organ Kidnap Stories, *FOAFtale News* no.23, 1991, p.6.
- エストニア① M. Kõiva, Bloodsuckers and Human Sausage Factories, *FOAFtale News* no. 43, 1998, p.9.
- ポーランド①②③ D. Czubala, The “Black Volga”: Child Abduction Urban Legend in Poland and Russia, *FOAFtale News* no.21, 1991, p.1.
- ブラジル① N. Scheper-Huges, *Death without Weeping*, The University Press of California, 1992, p.233.
- ブラジル② 『『殺しのピエロが』 子供をさらう』『ニューズウィーク』1995.7.12、p.53.
- ペルー① B. Radford, Bitter Harvest: The Organ-Snatching Urban Legends, *Skeptical Inquirer*, May-June, 1999. N. ワシテル (齋藤晃訳) 『神々と吸血鬼—民族学のフィールドから—』岩波書店、1997、p.91.
- グアテマラ① J. Shonder, Organ Theft Rumors in Guatemala, *FOAFtale News* no.35, 1994, p.1.
- グアテマラ② Body Parts Panics in Guatemala, *FOAFtale News* no.33-34, 1994, p.17.
- メキシコ① D. Samper, Cannibalizing Kids, *Journal of Folklore Research* vol.39 no.1, 2002, p.9.
- メキシコ② P. Burger, Organ Snatchers, *Magonia* 56, June 1996.
- キューバ① D. Samper, op. cit., p.7.
- ベトナム① Child Abduction & Organ Theft Rumors (Vietnam)  
<http://www.saigon-gpdaily.com.vn/Law/2009/5/71019/>
- ドイツ① R. ブレードニヒ (池田香世子・鈴木仁子訳) 『ジャンボジェットのネズミ』白水社、1993、pp.89-90.
- オランダ① P. Burger, op. cit.
- 中国① 「＜児童失踪＞臓器を狙って誘拐？続発する事件に神経とがらすー 広東省河源市」  
<http://www.recordchina.co.jp/group.php?groupid=30796>
- スウェーデン① G. Bennett, op. cit., p.199.
- イタリア①② G. Bennettt, op. cit., pp.199-200.
- 2) P. Burger, op. cit.
- 3) G. Bennett, op. cit., p.191.
- 4) エドガール・モラン (杉山光信訳) 『オルレアンの噂』みすず書房、1973.
- 5) Evolving kidney theft, *FOAFtale News* no.43, 1998, p.17.
- 6) それぞれの噂の出典は以下の通りである。
- イタリア③ G. Stilo, P. Toselli, The Kidnappers and the Black Ambulance, *FOAFtale News* no.23, 1991, p.5.
- イタリア④ G. Bennett, op. cit., p.200.
- コートジボワール① Two Die, Five Hurt in Riots after Child Abduction Rumours, AFP, October 25, 2008.
- ホンジュラス① G. Bennett, op. cit., p.199.
- ホンジュラス② G. Bennett, op. cit., p.200.
- オーストラリア② White Vans, ABC News [Australia], 16 May 2009.

- 7) Bennett, op. cit., p.191.
- 8) V. Campion-Vincent, Organ Theft Narratives, *Western Folklore* 49, 1997.  
V. Campion-Vincent, *Organ Theft Legends*, University Press of Mississippi, 2005.  
V. Campion-Vincent, The Diffusion of Organ-Theft Narratives, in *How Claims Spread*,  
ed. J. Best, pp.185-214, de Gruyter, 2001.  
T. Leventhal, *The Child Organ Trafficking Rumor : A Modern "Urban Legend"*, USIA,  
1994.  
拙稿「子供たちはどこに消えるのか」『青山学院女子短期大学紀要』第56輯、2002.
- 9) 例えば、ブラジルの都市庶民の状況については、N. Scheper-Huges, *Death without Weeping*, chap. 6 Everyday Violence が詳しい。
- 10) N. DiFonzo, P. Bordia, *Rumor Psychology : Social and Organizational Approaches*,  
American Psychological Association, 2006.
- 11) P. Pels, *Mumiani : The White Vampire*, *Ethnofoor* 5, 1992, p.165.
- 12) それぞれの噂の出典は以下のとおりである。  
① E. Ishichei, *Voices of the Poor in Africa*, The University of Rochester Press, 2002,  
p.115.  
② W. アレンズ (折島正司訳)『人喰いの神話』岩波書店、1982、p.13.  
③ N. Scheper-Huges, Theft of Life, *Anthropology Today* vol.12 no.3, 1996, p.3.  
④ Vampire Rumor Bares Fangs in Malawi, *New York Times*, December 24, 2002.
- 13) E. Ishichei, op. cit., p.113.
- 14) E. Ishichei, op. cit., p.116.
- 15) P. W. Geissler, "Kachinja" Are Coming!: Encounters around Medical Research Work in  
a Kenyan Village, *Africa* vol.75 no.2, 2005, p.174.
- 16) L. White, *Speaking with Vampires : Rumor and History in Colonial Africa*, The  
University of California Press, 2000, p.127.
- 17) L. White, op. cit., pp.128-36.
- 18) L. White, op. cit., chap.6.
- 19) E. Ishichei, op. cit., p.120.
- 20) 最近、ペルーで脂肪を取るために約50人を殺害したとして4人が逮捕された。(「遺体から  
脂肪、化粧品メーカーに販売? /ペルー殺人容疑で4人逮捕」『朝日新聞』2009.11.21夕刊。  
‘Fat for Cosmetics’ Murder Suspects Arrested in Peru, BBC, November 20, 2009. The  
“Pishtaco” Legend Strikes Back in Peru, November 21, 2009, Living in Peru. com)
- 21) 加藤隆浩「ピシュタコーアンデス世界における村落と都市の媒介者—」杉本良男編『伝統  
宗教と知識』(南山大学人類学研究所叢書IV) 1991、p.121.
- 22) それぞれの噂の出典は以下の通りである。  
① M. Weismantel, *White in Fat : The Anthropology of an Obsession* ed. by D. Kulick &  
A. Meneley, Penguin Books, 2005, p.47.  
②加藤、前掲、p.124.  
③細谷広美「植民地主義と他者表象—ペルーの『ピシュタコ』をめぐる語りの諸相」山路勝  
彦・田中雅一編『植民地主義と人類学』関西学院大学出版会、2002、p.434.
- 23) 谷口智子『新世界の悪魔—カトリック・ミッションとアンデス先住民宗教』大学教育出版、

- 2007、p.131.
- 24) 加藤隆活「アンデス高地農民の民間信仰」大貫良夫・木村秀雄編『文化人類学の展開』北樹出版、1998、p.122.
  - 25) 谷口、前掲、p.133.
  - 26) A. Canessa, Fear and Loathing on the Kharisiri Trail: Alterity and Identity in the Andes, *Journal of Royal Anthropological Institute* (NS) 6, 2000, pp.709-10, M. Weismantel, op. cit., p.53.
  - 27) M. Weismantel, op. cit., p.54.
  - 28) 加藤、前掲、1991、p.141.
  - 29) E. del Aguila, Pishtacos: Myth, Rumor, Resistance and Structural Inequalities in Colonial and Modern Peru.  
<http://www.interculturalidad.org/numero04/07011nt.htm>
  - 30) P. Gose, Sacrifice and the Commodity Form in the Andes, *Man* (N.S.) 21, 1994, p.305, A. Oliver-Smith, The Pishtaco: Institutionalized Fear in Highland Peru, *Journal of American Folklore* vol. 82 no.326, 1969, p.364.
  - 31) N. ワシュテル、前掲、p.89.
  - 32) M. Weismantel, op. cit., p.56.
  - 33) M. Weismantel, *Cholas and Pishtacos: Stories of Race and Sex in the Andes*, The University of Chicago Press, 2001, p.220.
  - 34) 加藤隆活「説話の潜在力」G・アンドラーデ・中牧弘充編『ラテンアメリカ 宗教と社会』新評論、1994、p.214.
  - 35) 細谷広美「テロ・軍隊・他者表象」遅野井茂雄・志柿光活他編『ラテンアメリカ世界を生きる』新評論、2001、p.286.
  - 36) 吉澤誠一郎「火会と天津教案（1870年）」『歴史学研究』第698号、1997、The Tientsin Massacre, 1870 in *Cambridge History of China*, vol.11, 1980, pp.78-81.
  - 37) Rumor and Rage, *People*, vol.41 no.15, 1994, *New York Times*, April 5, 1994、「不穏な噂の出どころは？」『ニューズウィーク』1994.4.20.
  - 38) 『朝日新聞』、『毎日新聞』2000.5.1夕刊、5.2.
  - 39) 外国人ではないが、2006年4月、複数の子どもを誘拐したと疑われた男女が群衆に襲撃された。殴打されて気を失い、火をつけられて死亡した。(Guatemala Mob Burns Kidnap Suspects Alive, AP, April 20, 2006) 2007年6月15日、ホンジュラス国境近くの村で子どもの切断された死体が発見された。国際養子を斡旋していた3人の女性が誘拐殺人を疑われて、群衆に襲撃された。殴打され、ガソリンをかけられ、1人は火をつけられて死亡、他の2人は火がつけられる寸前警察によって救助された。(Guatemala Mob Kills Suspected Organ Thieves, AP, June 16, 2007)
  - 40) 例えば、アメリカ国務省の統計では、グアテマラは1999年から2008年の10年間に28,906人の養子をアメリカに送った。ブラジルでも毎年5,000人近くを欧米、イスラエルへ養子に出している。(N. Scheper-Huges, 1992, p.233)